

神韻縹渺居士

茂木啓三郎

昭和二十六年の春頃であつたか、記憶は正確でないが、如水会有志の間で、昭和十一年卒業の大平正芳という池田大蔵大臣の秘書官が、來年の総選挙に郷里の香川県から立候補するらしい。なかなかの大物らしいから応援しようじゃないか」というささやきが起つた。その中心となり発起したのが弁護士松本正雄、キリンビールの高橋朝次郎、古河電工の小泉幸久の三君であつた。これが大平会である。毎月八日築地の栄家で必ず例会が開かれ、大平君も万難を排して出席し、時には池田総理も出てこられたように記憶する。会員は十二、三名くらい、如水会員のみ内輪の会合で、本当に胸襟を開いて話し合つたのである。大平君を是非内閣総理大臣にという念願が強烈に燃えていた。物心両面といたいが、物はとにかく、心の底から一生懸命に支援し、かつ祈つたのであるが、その願いが遂に実現したのである。如水会員の眼に狂いはなかつた。本当に嬉しかった。

周知のように東京高商 東京商大 一橋大学という学校の卒業生は、大部分が実業界で活動している。政治家は極めて少ない。今でも衆議院議員五名、参議院は二名に過ぎない。あるいはこれが当然かも知れないが、私どもの在学当時から卒業生を政界へ出そうとの強い念願が一部の教授や学生の間に起つてきたのであつた。事実、吉田茂首相も極めて短期間ながら在学したことがあるといわれ、緒方竹虎さんも一年間くらい在学して早稲田へ移られたし、石井光次郎さんは卒業生である。一橋の学風のしみ込んだ人を是非日本の最高責任者に、如水会員をもつと多く政界への熱望は今も相変わらず強いのである。そこで、会員中から立候補を計画し、先輩の大平さ

んに紹介をということになる。ところが、紹介して会ってもらつと、大平君は強くは政界入りをすすめないのである。「君、政界なんてそんな生易しいものじゃないよ。大変なところだよ」という。これには本人も当てが外れたかも知れないが、正直いつて紹介者の方もがっかりしたものであった。しかし、いざ立候補となると力強く応援してくれたようである。ある時、その一人の決起大会で当時幹事長であつた大平君の挨拶があつた。非常に流暢な熟弁である。私が「今日はヒドク雄弁だつたね」とささやくと、答えて曰く「先輩、僕だつて言語障害じやありませんよ」と。ほほえましき思ひ出である。

大平君の人物、政治家としての功業等については多くの人が語るであろうが、私は昨年十一月金比羅神社参拜のため高松に一泊、若干の人々と語り合つたが、郷里における大平君への信頼声望の厚くかつ高いのには驚いた。少し強くいえば、神様のような尊敬を受けているのである。反対党の人でも余り大平君の悪口をいうと票が減りますよという人もおつたくらいである。総理をやめたら郷里に帰ると真剣に語つていたといわれ、政界の駆引、権謀術数にもまれ 否、もまれればもまれるほど数段高い着眼と清らかな念願で人生を送つたように感じられる。それが大衆の心にしみこんで神様のように崇められるのだと思う。あと数年健在であつたら、どんなことになつていたろうか、興味も深いし惜しまれてならない。派手なところはなかつたが人物はたしかに立派であつた。その人物評であるが、ある時入江侍従長と話す機会があり、談たまたま大平君のことに及ぶと、「あの人は神韻縹渺とした方ですね」といわれる。帰つて辞書を引いてみると、「神韻 非常にすぐれた趣。縹渺 1、かすかではつきりしないさま 2、ひろくはてしのないさま」とある。私は思わずひそかに膝を打つて快哉をさげんだものである。このことは、ある時、大平君にも話して、「私は、これからあなたを神韻縹渺居士といいますよ」といったことである。もう少し生きて、その本領を充分に発揮してもらいたかつた。

(キッコーマン相談役)